

ミシェル・フーコー講義集成 < 11 > 「主体の解釈学」(1)  
コレージュ・ド・フランス講義 1981-82 ミシェル・フーコー著 廣瀬 浩司・原 和之訳 筑摩書房 (2004 年)

### 一九八二年一月十三日の講義 第一時限 (pp.53-76)

#### 「自己へ配慮する」における 3 つの問題 (p.53-55)

- 「自己へ配慮する」という言い回しがどんな文脈で出てきたか  
→ プラトンとソクラテスの対話
- ① 他者を統治しなくてはならない限りにおける、自己への配慮の必要性  
→ 「統治すること」の問題
- ② 教育の問題、教育の批判
  1. アテナイにおける教育、教育実践への批判 (=教育の学校的な欠如)
  2. 男性と少年の間の恋愛がどのように成立し、どのように展開するのかという点への批判 (=教育の恋愛的な欠如)→ 「統治されること」の問題

おわかりのとおり、これらの問題は実は互いに結びついています。統治することができるよう自己へ配慮するということと、十分にそして適切に統治されてこなかったがゆえに自己へ配慮するということ。「統治すること」「統治されること」「自己へ配慮すること」。ここにあらわれるシークエンス、連続は、3世紀から4世紀にかけてキリスト教会の中に司牧的な一大権力が成立するに至るまでの、長くて複雑な歴史を持っています。(p.55, 1.3-7)

- ③ 無知  
知っておくべきことを知らないということであると同時に、自己を知らないということ、そうした事柄を知らないことすら知らないということ

- 三つの問題
  - 政治権力の行使
  - 教育
  - それと知られぬ無知

#### 教育と自己陶冶の相互作用→古代ギリシアにおける哲学と霊性の相互作用 (p.55-58)

- 『アルキビアデス』における「自己へ配慮せよ」の命法の出現には少々奇妙なものがある (p.55, 1.18)

ソクラテスはアルキビアデスに、彼が親愛の何たるかすら知らないということ、そしてよき統治が何たるかすら知らないということを示しました。ソクラテスがこれをアルキビアデスに示すと、アルキビアデスはたちまち絶望します。そこでソクラテスはこう言って彼を慰めるのです。

「大丈夫だよ、あまり悲観することはない。結局のところ、君は50歳になっているわけではない。まだ若いだから、時間はある。」(p.55, l.21-p.56, l.3)

→何をする時間があるというのか？

- ソクラテス「君は無知だが、まだ若い。だから、時間がある。学ぶためではなく、自己へ配慮する時間がある。」

こうした推論から普通導かれる帰結、予期される帰結である「学ぶこと」と、「自己へ配慮すること」という命令とのあいだ、何かを習得するという意味での教育と、自己の陶冶、自己育成、ドイツ人であれば *Selbstbildung* と呼ぶようなものを中心としたこの陶冶、パイディアのもう一つの形式との間、まさにこの乖離やせめぎ合い、接近においてこそ、古代の世界における哲学と霊性の相互作用に関わる一連の問題が醸成されることになるのです。(p.56, l.9-13)

- 対話篇の中で、非常にはっきりと、自己へ配慮するということはどういうことなのかという問いかけが出てくる
  - ① 「自己とは何か」
  - ② 配慮するとはどういうことか→自己への配慮の最初の理論、<自己への配慮>の最初の大規模な理論的出現  
※この実践の総体は、実際には古い実践、経験の方式、種類、容態の中に根ざしている

ある実践、主体の存在容態を変容させ、あるがままの主体を変化させ、これを変容させることで資格を与えるような、そうした特定の実践なしには真理に到達し得ないこと、このことは前哲学的な主題であり多少なりとも儀式化された非常に多くの手続きを生み出してきました。(p.57, l.4-6)

真理に到達するには自己の技術（テクノロジー）を実践しなくてはならないとするこの考え方は、古代ギリシアでは、そして全てとはいはないまでも、少なくともかなりの文明においては、いくつかの実践のなかにあらわれていました。(p.57, l.8-10)

- 浄化の儀式（浄化なくして神の保持する真理との関係なし）
- 魂を集中する技術（魂が散ってしまわぬよう、動かぬよう集中する）
- 退却の技術（アナコーレーシス。可視的な不在の技術）
- 忍耐の実践（魂の集中と退却に結びついて、辛苦に耐え誘惑に抵抗する）

#### ピュタゴラス思想における自己の技術の要素 (pp.58-60)

- 上記の痕跡の大部分は、ピュタゴラス思想、特にその修練にかかわる部分に統合されている
  - (1) 夢を見るに先立って行われる浄化、夢を見る準備
  - (2) 試練の技術、試練という価値を持つ状況を作り出し、耐えられるかどうか自らを試してみる→プラトン以前にも、一般に、特にピュタゴラス派の人々においては、何か自己への配慮といったものの圏域に属する一連の技術が確認される

プラトンにおいてすら、そして確かに彼にとって自己の配慮は全て認識および自己の認識という形に引き戻されるわけですが、にもかかわらず、そこにはこうした技術の非常に多くの痕跡を見出すことができる (pp.59-60)

### プラトンの契機 (pp.60-61)

こうした自己の技術はプラトン思想の内部に広がっていったわけですが、ただこのことは、この技術が大掛かりな移動、再活性化、組織化・再編を蒙り、やがてはヘレニズム及びローマの時代には自己の陶冶となる、その第一歩に過ぎないと思われま (p.60, l.13-15)

- こうした全ての背後には大きな樹形図がある  
→これは連続的な展開として読めるが、その中には全体的な転移や再編を示しているような、重要な契機がいくつかある
- **プラトンの契機**：プラトンやソクラテスよりはるか以前の、古い自己の技術全体の漸進的な再編が成立した
  - 古い自己の技術は全て、どこかで根底的な再編をこうむった
  - 哲学的思考の中で<自己への配慮>の問題は、今挙げてきたような技術において以前は見られなかった要素を全く異なったレベルで、全く異なった目的で、そして一部異なったかたちで再び取り上げている
- これらはみな、哲学の中では初めての出現になるが技術的にはそれ以前の伝統と連続している

### 自己へ配慮するとはどういうことなのか (pp.62)

- 「自己への配慮」→自己へ配慮するとはどういうことか
    - ① 「自己へ配慮しなければならない」における、配慮すべきこのもの、この対象とはどのようなものだろうか=**自己とは何か**
    - ② 他者を統治し支配するための自己への配慮はどのような形を取るべきだろうか  
→私自身への配慮は、同時に他者をうまく統治することを可能にする技法（テクネー）を明らかにしなければならない  
=**配慮とは何か**
- 自己と自己への配慮について、他者を支配するのに必要な知がそこから派生してくるような、そうした定義を与えなくてはならない

### 自己とは何か、クレシスの概念と主体としての魂 (p.63-

- デルフォイの神託「汝自身を知らねばならぬ」  
→汝自身、自己とは何か

「この関係とはどんなものなのか、この再帰代名詞 heauton によって、何が指示されているのか、主体と客体の側で同じであるこの要素とは、いったい何なのか」ということです。君は自己に配慮しなくてはならない。配慮するのは君なのだが、君は君と同じもの、配慮する主体と同じものである何かへ配慮する。それは対象としての君自身なのだ。(p.64, l.5-9) =再帰的

- この配慮の両方の側、配慮の主体と配慮の対象の双方に存在し、同一であるこの要素とは何か
  - = 「魂に配慮しなければならない」
- 魂の定義、魂がどのように考えられているかについて（『アルキビアデス』は）他のところで見られるものとかなり異なっている
- 「私自身とは何か」という問いから「私は私の魂である」という答えに至る分析の運動の問い

Q. 「ソクラテスがアルキビアデスに語る」という時、これは何を意味しているのか？

A. ソクラテスが言語を使っている、ということの意味する

= ソクラテスがアルキビアデスに対して行なっているような言語活動を考える際に想定されているような主体はどんなものだろうか？

→ 行動と主体との間に線を引く。

一般に、身体が何かするときにはその身体を用いる者がいる、ということになります。しかしこの、身体を用いる者とはどんなものでしょうか。……つまり実際に身体を、身体のさまざまな部分を、さまざまな器官を、ということは道具を使い、最終的には言語を使うことになるこの唯一の者とはいったい何だろうか、ということです。そして、これは魂であり、魂以外にあり得ません。つまり、身体的、道具的、言語的なあらゆる行動の主体とは魂なのです。(p.67, l.1-9)

→ ただ行動の主体たる限りでの魂、身体を、身体の器官を、この道具を使う者である限りでの魂

※ 「使う」 = ギリシア語の「(動) クレースタイ」「(名) クレーシス」の翻訳

- khraomai <私は使う> の多重の意味
  - 私は使う、私は利用する（道具を利用する）
  - 私が取る行動、態度（ある態度）
  - 他人とのある関係
  - 自己に対するある態度

（プラトンが、自己が何たるかを捉えようとしてこのクレーシス/クレースタイという概念を用いるとき）彼は実際には、世界や身体に対する魂の道具的な関係ではなく、主体が周囲のもの、手元にあるさまざまな対象や、彼が関係を取り結ぶ他者、自分の身体、そして自分自身に対して取ることになる、いわば単独的な、超越的な立場のことを指し示そうとしているのです。(p.68, l.12-15)

= 主体としての魂

= クレーシスの概念……自己への配慮及びそれがとるさまざまな形式の全歴史を通じて繰り返り現れてくる概念

クレシスの概念はとりわけストア派において重要になるでしょう。この概念はエピクテトスにおいて、自己への配慮の理論と実践の中心に位置するものにすらなるでしょう。自己へ配慮することは、いくつかの事柄の主体である限りでの自己へ配慮することとなるでしょう。

この自己は、道具的行動、他者との関係、行動や態度全般、そしてさらにまた自己への関係の主体でもあります。この主体、使用し、態度をとり、関係を取り結ぶこの主体である限りにおいて、私たちは自己自身に気を配らなくてはなりません。(行動、振舞い、関係、態度など、幅広い多義性を持つ) このクレシスの主体である限りにおいての自己に配慮するということが、これこそが問題なのです。(p.68, l.19-p.69, l.2)

### 主体としての魂から区別される3つのもの (p.69-70)

- (1) 医者  
→自分自身ではなく、自分の体を配慮している
- (2) 家長 (家政、エコノミー)  
→自分の財産すなわち自分に属するものに対して配慮している
- (3) 愛人 (アルキビアデスを追い回していた人たち)  
→彼らが配慮しているのは単にアルキビアデスの身体、彼の身体の美しさ  
※ソクラテスはアルキビアデスが自分自身を配慮することになる、そのやり方こそを配慮していた

### <自己への配慮>と師 (p.70-71)

- <自己への配慮>における師の位置を規定するもの  
→自己への配慮とは実際、常に誰か別の人への関係を通る必要がある  
=この別の人が師
- 師を経由せずに自己へ配慮することはできない
- 師という立場を規定しているのは、彼が配慮しているものが、他ならぬ導こうとする相手の行う、自分自身に対する配慮でもあるという点
- 師とは、主体が自分について行う配慮を配慮するものであり、弟子に対する愛の中に、弟子が自分について行う配慮を配慮する可能性を見出すもののこと

### 今後の問題点 (pp.71-72)

- (1) 自己への配慮と医術、自己への配慮と身体の手当て、自己への配慮と養生の関係の問題
- (2) 自己への配慮と社会的活動、一家の父や夫、息子、奴隷の所有者、主人としての私的な義務との間の関係の問題
- (3) 自己への配慮と恋愛関係の問題

気になった点

道具としての魂と主体としての魂の明白な違いとは？定義の規模の大きさ？